

鍼灸研究に関する一考察

—鍼灸師で博士学位取得者の実状を中心に—

筑波技術大学 千葉県立千葉盲学校 首都大学東京大学院都市環境科学研究科

箕輪 政博

筑波技術大学

形井 秀一

I 緒言

1912年（明治45年）、『三交』（東京鍼灸雑誌）は、学位制定（1898年〈明治31〉勅令344号）以来博士の取得者は777名で、うち医学博士は232名であったと当時の日本の状況を報じている。短い記事であって、鍼灸教育との関連や影響まで論じられてはいない。むしろ、当時鍼灸に関する高等教育機関は存在せず、鍼灸に関する専門学校の設立が斯界の切実な願いであったことは、当時の鍼灸雑誌からも伺い知ることができる。

一方、文部科学省のデータによると、現代日本（2007年）で研究に従事する博士の総数は14万6千人余りで、そのうち、自然科学者は約10万人になっており、ポストドクター（ポスドク）の就職難問題は社会的な関心でもある¹⁾。

鍼灸研究を俯瞰してみると、戦前の鍼灸研究は帝国大学における医学者たちの研究が中心であり、それが鍼灸の地位の確保や向上に寄与していたといえよう。戦後になり、鍼灸師にも医学博士を取得する者が現れ始め、芹沢勝助、木下晴都らが鍼灸教育や研究の牽引者であった。

1990年代になり、明治鍼灸大学（現明治国際医療大学）が博士課程を設置し、1997年には「医疾令以来」といわれた鍼灸学博士が誕生したことはまだ記憶に新しい。現在、鍼灸師を教育する大学が6校、2007年には鍼灸の大学院大学も誕生し、今後、鍼灸界も後期高等教育の進展が予想される。

ここでは、鍼灸研究の変遷を追い、その質の変化や現状と課題について、博士学位取得者の実状に焦点をあてて報告する。

II 研究方法

1. 日本の研究者の概要について

文部科学省、厚生労働省、総務省統計局の統計データを利用した。

2. 鍼灸師で医学博士を取得した者について

1992年の『医道の日本』の「医学博士を取得した鍼灸師」として掲載された、芹沢以降28名（92年まで）を基礎データとした。それ以外の者についてはWeb上にて明治国際医療大学、関西医療大学、筑波技術大学、森ノ宮医療大学、伝統医療大学院大学等のHPおよび検索エンジンから可能な限り抽出した。学位取得年や授与大学および研究内容などについて、大学HPや国立国会図書館の検索システムNDL-OPACを用いて特定した。

3. 鍼灸学博士について

北出らの報告に基づき、2007年までの明治国際医療大学大学院の博士課程修了者および論文博士を抽出し、Web上で明治国際医療大学同窓会報（たには会報）によって学位取得年と研究内容を特定した。

Ⅲ 結果と考察

1. 日本の博士の実状

文部科学省の学校基本調査によると、2007年の博士課程在籍者数は約7万人であり、そのうち後期課程修了者は11720人、さらにそのうち保健医療分野は808人であった²⁾。旧文部省による施策で大学院の定員が増えた結果、博士号取得者が増加し、その延長でポストク数も増加したが、増加に見合うだけの安定した雇用の場が確保できていないのが現状である。文部科学省は、ポストクの雇用支援形態は多様化しており、特に21世紀COEプログラムを中心にした競争的資金で雇用され身分上不安定な者が多数を占めると、現状を分析している³⁾。

また、2007年、政府の規制改革会議、教育・研究タスクフォースは「教育と研究の質の向上に向けた大学・大学院改革に関する基本的考え方」で、グローバル化・自由競争の現代に、人材力の強化は必須であり、競争環境の整備をして、大学・大学院の教育と研究の質を高め、産・官・法曹等の実社会から高い評価を得る人材を輩出することが不可欠であるとしている。これらに見合った資金配分の必要性についても言及しており³⁾、国としてはポストク数を減らすことよりも競争原理を働かせ、教育研究の質のさらなる向上を目論んでいるようだ。

2. 近代から戦後にかけての鍼灸研究の流れ

近代から戦後、昭和中期に至る主要な鍼灸の科学的研究の概要について、芹澤の『鍼灸の科学理論篇』⁴⁾ および広瀬の『鍼灸の歴史』⁵⁾ を参考に表1のようにまとめた。

(1) 大正から昭和初期の医師たちの鍼灸科学研究の概観

戦前の研究は官立大学の医学者の医科学的研究が中心であった。近代の代表的な鍼灸に関する雑誌『日本鍼灸雑誌』『東洋鍼灸雑誌』『三交』ではこれらの研究についてたびたび報告され、研究者自らが研究の意義について言及している記述もある。よって、これらの研究は当時の鍼灸の地位の確保や向上に寄与していたといえるだろう。研究内容は、総じて血液含有物質に対する鍼灸の影響の研究が中心で、鍼灸の生体への作用機序の解明が命題であったようだ。また、灸に関する研究が比較的多い理由は分からないが、現代の灸療法の理論的根拠の大本になっていることに間違いはない。芹澤は「大正時代から昭和初期に至る年代は、鍼灸に関心を持つ医学界や、施術者の啓蒙時代ともいべき時代である」と表現しているように⁴⁾、この時代の研究成果は、明治時代に一度途絶えかけた日本の鍼灸の復活を歴史上裏付ける事実とも言えるだろう。

そのなかでも、駒井一雄は生家が特に灸療法で有名だったこともあってか、鍼灸研究のみならず、東邦医学社を興し鍼灸研究雑誌『東邦医学』を創刊して、啓発目的の講習会を主催し、鍼灸の復興に多大な貢献をしたことは特筆すべきであろう。また、『東邦医学』の編集者として竹山晋一郎を見だし、竹山の活動と東邦医学講習会が後の「経絡治療」の誕生へつながったので、戦後の日本鍼灸への礎を成したという意味でも大きな意義がある。現在、斯界のみならず鍼灸教育界では駒井の名を聞く機会が比較的少ないと感じる。駒井の功績を検証して後世に語り継ぐことを鍼灸研究の一課題として取り組むべきであると考えらる。

(2) 戦後～昭和の後半にかけての研究について

長浜善夫と丸山昌郎の経絡経穴の研究や石川太刀雄の皮電点などは現代の鍼灸教科書でも引用説明されているし、中谷義雄の名は知らなくても「良導絡」を一度は耳にした者は多いだろう。また、間中善

表1 近代から昭和までの大学における鍼灸に関する主な科学研究

年代	研究者	大学	研究名
1904	三浦謹之助	東京大学	鍼治法に就て
1912	石川日出鶴丸	京都大学	自律神経と鍼灸に関する研究～門下生論文多数輩出
1912	樫田十次郎・原田重雄	東京大学	灸治に就て
1914	後藤道雄	京都大学	ヘッド氏帯と我が国古来の鍼灸術に就て
1918	越智真逸	京都医大	灸治が腎臓の機能、殊に利尿に及ぼす影響について
1926	青地正	京都大学	灸の血球、並びに血清に及ぼす影響、灸の本態について
1926	時枝薫	京都大学	灸の実験的研究
1927	原志免太郎	九州大学	灸の血色素量並びに赤血球に及ぼす影響他数編
1930	藤井秀二	大阪大学	小児鍼の実験的研究
1930	瀧野憲照	京都大学	灸の血液内カリウムおよびカルシウム含有量に及ぼす影響について
1930	駒井一雄	京都府医大学	灸の血液内心臓収縮性物質並びに血管収縮性物質の増減に及ぼす影響他
1932	長門谷丈一	大阪大学	灸の局所温度に及ぼす影響他数編
1932	山下清吉	金沢医大	白血球機能並びに核型に及ぼす灸の影響
1932	水野重元	大阪大学	鍼術の生物学的研究
1936	駒井一雄	京都府医大学	経穴の人体実験
.....
以下戦後			
1949	長浜善夫・丸山昌郎	千葉大・昭和大	経絡経穴の研究
1950	中谷義雄	京都大学	良導絡の研究
1952	寺田文治郎	日本大学	鍼の薬理
1955	南外弘	金沢大学	人迎施鍼の血圧並びに末梢血液像に及ぼす影響
1956	藤田六朗	金沢大学	経絡の研究－筋運動主因説、圧診点と丘診点の研究他
不明	杉靖三郎・多田井吉之介	東京教育大学	ストレス学説より見た鍼灸・一連の研究
不明	高岡松雄	東京医大	皮内置鍼についての研究
1957	間中善雄	京都大学	内臓体表反射、体表内蔵反射の臨床研究
1959	石川太刀雄	金沢医大	内臓体表反射の研究、皮電点の発見

注) 年代は代表的な研究の年代で前後のずれはある

雄の研究や功績は分からなくても、『医道の日本』誌の「間中賞」は聞き慣れているはずである。この時代の研究者は最近の鍼灸学校の学生にとっては歴史上の人物に映っているかも知れないが、臨床経験30年以上のベテラン鍼灸師にとっては同時代性があり、かつて講演などで警咳に接した可能性もあるだろうし、研究成果が日々の臨床へ応用されている場合もある。その他の研究については、教育現場で教員が言及しない限り、実際に見聞きする機会は乏しくなっている。しかし、現代の日本の鍼灸の理論面はこれらの研究成果の土台があって成り立っていることを鍼灸師は知っておいたほうがいいだろう。

芹澤は戦後の研究について以下のように表現している⁴⁾。

「総じて戦後の新しい医学の動向が、分析から総合へ、病名診断から病証の把握へ、形態病理学から病態生理学へと進み、東洋医学の思想と一致するストレス学説、レイリー現象、精神身体医学等の新しい医学が登場し、病源の明らかな病気がつぎつぎに新薬で治癒していくのに、慢性内因説の病気が一向に後をたたない現状から、これらの病気に効果のある古い施術としての東洋医術、特に鍼、灸術が新しい脚光をあびて、クローズアップされてきたともいえるのである」

3. 戦後から2007年までに博士号を取得した鍼灸師の実状

(1) 推定数

基礎データである『医道の日本』の「医学博士を取得した鍼灸師」に掲載された28名の根拠は特に提示されていない⁶⁾。今回は、

表2 戦後から2007年までに博士号を取得した推定鍼灸師数

博士号	医学博士	鍼灸学博士	その他の博士	合計
博士数	49	54	7	110

2007年時点までの博士について、Web上の大学等のHPや検索エンジン、NDL-OPACなどを駆使して可能な限り抽出したが、一定の抽出方法があるとも言いがたい。鍼灸師の資格を有することを前提にして、博士論文名では鍼灸の語句が用いられているが、鍼灸師の資格の有無を特定できない者は除外した。今回の方法で特定できなかった者や、Web上では検索不可能な者もいる可能性は否定できないので、「戦後から2007年までに博士号を取得した鍼灸師数は110人以上いると考えられる」というのが正確であろう。

(2) 戦後から2007年までに医学博士号を取得した鍼灸師について (表3)

1915年(大正4年)、東京杉並に生まれた芹澤勝助は、国立東京盲学校師範部を卒業後、日本大学で文学士を取得、1951～1961年(昭和26～36年)に東京教育大学の杉靖三郎教授や東京大学医学部の大島良雄教授、講師高橋暁正博士の下で生理学や臨床医学研究に従事して、1961年(昭和36年)昭和大学から「経絡経穴の医学的研究」副論文8編で、日本で初めて鍼灸師として医学博士号を授与されたと考えられる。芹澤を追うように東京教育大(現筑波大学理療科教員養成施設)系列から年代順に森和氏、西條一止氏、長尾栄一氏と続き、この系列からは脈々と日本の鍼灸研究を担う医学博士が輩出されている。

1980年代になるとこの系列以外にも医学博士を取得する者が現れ始め、その先駆けとして後に日本鍼灸師会会長や日本鍼灸治療学会会長などを歴任する木下晴都が、昭和大学において鍼の沈痛機序を研究して1982年に(なんと67歳にして!)学位を取得する。昭和大学では、当時の第一生理学教室において、鍼麻酔と鍼鎮痛発現機序について研究を行っていた武重千冬教授がこの後も続く鍼灸師の医科学研究に門戸を開いていたと考えられる。また関西では、大阪医大で兵藤正義教授の下で鍼麻酔の臨床研究に従事した北出利勝氏が1987年に学位を授与され、1988年には、木下の後昭和大学から古屋英治氏、松山陽太郎氏、會澤重勝氏が続く。

90年代幕開けの年には過去最高の6人が学位を取得し、授与大学も京都大学をはじめ国公私立すべて異なっていることも80年代以降の流れや研究の広がり象徴しているといえよう。90年代後半からは明治鍼灸大学の修士課程を経由してほかの医大や医学部で研究して医学博士号を取得する者(甲田久士氏ら)も出てくる。

年代別では、60年代1人、70年代3人、80年代14人、90年代23人、2000～05までで6人(不明3人)と2000年代に入って取得者数の勢いは落ちているが、これは97年以降の明治鍼灸大学における鍼灸学博士の誕生が影響していると考えられる。

研究内容に関しては、80年代以前は経絡・経穴を基礎医学的に研究する手法が中心であり、80年代からは鍼灸作用機序を生理学的・生化学的に研究する手法が主流になり、特に70年代の中国の鍼麻酔の影響から鍼の鎮痛効果に関する研究がウエイトを占めるようになる。また、小曾戸洋氏や古屋英治氏、真柳誠氏などのように薬剤師とダブルライセンスで研究に従事し学位を取得する者が散発的に現れ始める。90年代になっても研究手法は80年代を踏襲しているようだが、臨床研究や社会医学的な研究が徐々に見受けられるようになることが特徴といえよう。当時も今も、鍼灸の科学的なメカニズムは確立されてはいない。よって、これらの研究は、当初は戦前戦後の鍼灸の研究者の延長上に、その後は、鍼灸に理解や興味のある研究者の受け入れがあって初めてなされたのであろう。まだ大学院の門戸自体も広くはなく、鍼灸の研究などという医学から見れば疑問視されがちな研究を大学院で行う苦勞は察するに余りある。

いずれにしても、鍼灸師としての医学博士の誕生とその数や範囲の広がりには日本の鍼灸史上重要な事実であり、これらの研究者が現在も日本の鍼灸をリードしているのである。

(3) 鍼灸学博士について

現在、明治国際医療大学に博士後期課程(鍼灸学博士)が唯一設置され、同大大学院鍼灸研究科は5つの専攻分野(統合医療学・伝統鍼灸学・鍼灸基礎医学・鍼灸臨床医学・総合臨床鍼灸学)がある。研

究者として豊かな学識を有し、鍼灸医学に関する専門的な知識や高度な学術を修得して、文化の進展に寄与する人材育成を目的にしている⁷⁾。

北出らの報告によると、2007年までの明治国際医療大学大学院の修了者は、修士課程が128名、博士課程が42名おり、さらに論文博士が12名であった。修士課程修了者のうち10名8名が京都大学など他の大学院へ進学していた。さらに、修士課程修了者のうち6割が博士課程へ、博士課程修了者のうち9割が教員になったと報告されている⁸⁾。

表3 戦後から2007年までに医学博士号を取得した鍼灸師（推定数）

NO	年	氏名	授与大学	論文名	分野
1	1961	芹沢勝助	昭和大学	経絡・経穴の医学的研究	東洋医学
2	1970	森和	東京大学	東洋医学診断体系の臨床的研究	東洋医学
3	1977	西條一止	東京大学	皮膚温分布と経絡、経穴現象	東洋医学
4	1979	長尾栄一	東京大学	皮下血行動態と経絡、経穴現象	東洋医学
5	1980	石井健之助	日本大学	静脈の緊張性反応と置鍼との関係	臨床医学
6	1982	木下晴都	昭和大学	鍼の局所鎮痛に関する臨床とその作用機序	臨床医学
7	1983	西谷郁子	帝京大学	灸の過酸化脂質の低下作用（1）（2）	基礎医学
8	1985	小曾戸洋	日本大学	EFFECTS OF WU-LING-SAN (五苓散) ON ETHANOL METABOLISM IN MICE (マウスにおける五苓散のアルコール代謝に及ぼす影響について)	基礎医学
9	1986	矢澤一博	北里大学	麻酔動物における鍼（はり）および皮膚の侵害性刺激によって誘発される心臓および膀胱の反射性反応の神経生理学的機序	基礎医学
10	1987	矢野忠	帝京大学	犬の液性調節系特に脳下垂体-副腎皮質系に及ぼす鍼通電の効果に関する研究	基礎医学
11	1987	田山文隆	久留米医科大学	ハリ通電刺激の効果に関する臨床生理学的研究	基礎医学
12	1987	北出利勝	大阪医科大学	D-フェニルアラニンによる鍼鎮痛及び鍼麻酔の増強効果に関する研究-痛覚閾値に及ぼす影響とナロキソンによる拮抗作用	基礎医学
13	1987	森山朝正	埼玉医科大学	鍼刺激によってヒトの筋交感神経活動が初期に EXCITATION、刺激中に INHIBITION を起こす現象の微小神経電図法による検討	基礎医学
14	1988	古屋英治	昭和大学	薬物性肝障害における網内系機能	基礎医学
15	1988	松山陽太郎	昭和大学	ラットの血圧及びほかの生理値に及ぼす長期的灸刺激の影響	基礎医学
16	1988	香澤重勝	昭和大学	薬理灸に関する基礎的研究-施灸部位の血管透過性の変化	基礎医学
17	1989	松本勲	京都医大	容量プレステモグラムによる下肢血液分布変化の解析	基礎医学
18	1989	豊田勝良	名古屋市立大学	上肢及びその周辺の位置する経絡・経穴と人体構成要素との関連について肉眼解剖的研究	東洋医学
19	1990	尾崎昭弘	京都大学	ヒトの外受容性振動誘発指屈曲反射に対する鍼灸刺激の抑制機序	基礎医学
20	1990	久住武	昭和大学	鼻症状に対する片手鍼通電刺激の影響	臨床医学
21	1990	小田博久	鳥取大学	鍼鎮痛効果を得るための同心状電極	基礎医学
22	1990	吉備昇	大阪市大	歯冠計測値からみた古代近畿・中国地方人の特性	その他
23	1990	黄志良	神戸大学	体温の概日のリズムと日常生活特に運動習慣との関係	その他
24	1990	仲野弥和	三重大学	モルモット実験喘息の遅延性反応に及ぼす SO ₂ または NO ₂ の影響	基礎医学
25	1991	野口栄太郎	埼玉医科大学	ラット胃酸分泌に及ぼす鍼刺激の効果	基礎医学
26	1991	廖登稔	東北大学	鍼刺激に伴う「ひびき」感覚の電気生理学的研究	基礎医学
27	1992	関野光雄	東邦大学	鍼刺激による深部体温の変化	臨床医学
28	1992	二本柳賢司	名古屋大学	銀イオンによる骨格筋収縮に及ぼす金イオンの効果	基礎医学
29	1992	後藤修司	昭和大学	老人医療費に影響を与える要因分析	社会医学
30	1992	形井秀一	順天堂大学	慢性前立腺炎に対する鍼通電療法	臨床医学
31	1992	真柳誠	昭和大学	ラット肝の薬物代謝酵素と脂質過酸化の及ぼすセリ科和漢薬の影響	その他
32	1992	秋元恵実	杏林大学	鍼刺激に対する末梢循環応答の定量的評価	基礎
33	1992	東家一雄	和歌山県医	食虫目スンス口蓋扁疣の免疫組織学的性状に関する研究	その他
34	1995	山口智	埼玉医科大学	鍼治療が瞳孔反応に及ぼす影響	基礎医学
35	1995	榎田高士	近畿大学	成人 T 細胞白血病由来因子 (ATL-derived factor : ADF) の心筋虚血再灌流不整脈におよぼす影響についての実験的検討	基礎医学
36	1996	甲田久士	名古屋大学	取り出し標本におけるイヌ内臓ポリマーダル受容器のヒスタミンによる興奮と熱反応促進効果は H ₁ 受容体を介している	基礎医学
37	1996	山田鑑照	名古屋大学	ラット皮膚におけるリンパ管と CGPR 並びに SP 含有神経線維との密接な関係についての考察	基礎医学

(表 3 つづき)

38	1997	篠原正明	鳥取大学	スペクトル解析からみた刺鍼による心拍数の減少と動脈波伝播時間の短縮	基礎医学
39	1997	林知也	岐阜大学	ベクトル電子常磁性共鳴法によるウシ血清アルブミン溶液およびゲル状態における SH 基微環境の解析	基礎医学
40	1999	白島庸	東邦大学	鍼治療による血行動態の変化	基礎医学
41	1999	大島稔	大阪大学	仔ネコ視神経の慢性電気刺激による一次視覚野ニューロン眼球優位性の変化	その他
42	2000	大沢秀雄	昭和大学	麻酔ラットにおける鍼通電刺激によって誘発される瞳孔散大の神経性機序	基礎医学
43	2001	鈴木由起子	昭和大学	高フルクトース食飼育ラットの脂質変化に対する鍼刺激の影響	基礎医学
44	2002	木村研一	和歌山県医	微小神経電図法による反射性皮膚交感神経活動のバースト波形の性質と habituation について	基礎医学
45	2004	木村友昭	昭和大学	ヒト示指刺激による体性感覚皮質初期脳磁場 (N20m) 信号源は内側から外側方向に移動する	基礎医学
46	2004	森英俊	新潟大学	ヒトへの鍼通電による免疫調節は自律神経系の刺激による可能性がある	基礎医学
47	2005	緒方昭広	愛知医科大学	低頻度と高頻度の鍼刺激は異なった機序により精神性ストレスによる発汗を抑制する	基礎医学
48	不明	小俣浩	埼玉医科大学	不明	不明
49	不明	山本博司	不明	不明	不明

ここで、研究内容について、医学博士49名と鍼灸学博士54名の論文名をもとに基礎医学、臨床医学、東洋医学、その他に分類してみる (図1)。医学博士の研究が基礎研究にウエイトが置かれていたのに対し、鍼灸学博士の研究は臨床医学が半数を占めている。医学博士の研究はそれまでの研究者の流れもあろうし、臨床研究を望んでも叶う環境が整っていなかったと予測される。しかし、明治鍼灸短期大学の設置以降、鍼灸に理解のある医師や科学者が参集するようになり、大学院においては臨床研究が実践できる環境が整備され比較的容易に研究できるようになったと考えられる。

博士号を授与された者ならば、当然、研究職で生計を立てることを望むが、すべての博士が鍼灸大学の教官になれるわけではない。よって、近年の鍼灸専門学校の急増は、鍼灸学博士の受け皿という意味ではプラスに働いたと言えるだろう。医疾令以来の鍼灸学博士は、日本鍼灸の推進のみならず、世界に誇れる日本医療文化としての発信者としての期待も大きい。今後も博士は増えていくはずであるが、その真価が問われる日は近い。

(4) その他の博士について (表4)

佐々木和郎氏の研究は、我々鍼灸師が日々感じている筋肉の硬さと鍼灸の関係を工学的研究し、山下仁氏の研究は安全性という医学に対する時代の要請を反映したものである。また、和久田哲治氏の研究は、これまで多くの鍼灸師が鍼灸古典や鍼灸医学史研究に従事するなかで、学術的な研究として文学博

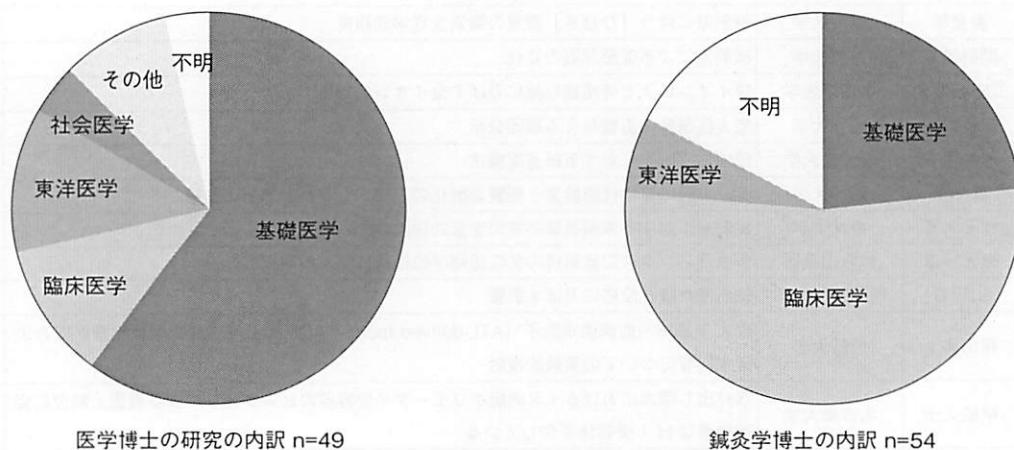


図1 医学博士と鍼灸学博士の研究内容の比較

表4 その他の博士号について

NO	年	氏名	学位	授与大学	論文名
1	1985	戸田静男	薬学博士	静岡薬科大学	生薬から天然酸化防止剤の検索および関連物質の抗酸化性の検討
2	1993	吉川恵士	学術博士	筑波大学	本態性高血圧症の循環動態と低周波鍼通電療法の効果
3	1994	河村廣定	歯学博士	朝日大学	針通電による鎮痛に関与する末梢神経線維群
4	1997	佐々木和郎	工学博士	東北大学	鍼灸医学における筋肉の硬さ計測に関する研究
5	2002	山下仁	保健学博士	東京大学	鍼治療の安全性情報確立のための臨床研究：有害事象の前向き調査
6	2002	志村まゆら	理学博士	お茶の水女子大学	麻酔ラットの体性感覚刺激による眼底血流及び瞳孔の反応
7	2006	和久田哲治	文学博士	佛教大学	鍼灸、手技療法史に関する研究

士号を授与されたことは初めてではないかと考えられる。これらの研究は、鍼灸研究の幅の広がりや今後の研究の質の方向性を示唆しているし、学際的な研究は鍼灸の啓発にもつながるだろう。

(5) 修士について

明治国際医療大学大学院の修士課程修了者である128名について、本稿では研究内容まで調査できなかった。また、これ以外の大学院修士課程における鍼灸研究については調査方法に限界があり、実状は不明である。ここでは、鍼灸師で修士号を取得している者は推定で150～200名いるとしか表現できない。第3回社会鍼灸学研究会の発表者のように、修士課程において医療経済学的、社会的あるいは人類学的な鍼灸研究をしている者も多数いることが予想され、いずれ博士号を授与されれば鍼灸研究の土台の強化につながるはずである。

IV 乗り遅れてしまった鍼灸界とその影響

戦後の優秀な臨床家として、いわゆる古典派（経絡治療を主とする派）には柳谷素霊、岡部素道、井上恵理、西沢道允など、現代派として（現代反射療点を施術や盲学校関係者）佐藤熊太郎、杉浦四郎、平方達雄などがいると芹澤が評しているように⁴⁾、いわゆる研究者ではないが日本の鍼灸臨床を築き上げてきた先陣が道を開き、この弟子たちが次の世代を構成し現代日本鍼灸臨床の底辺をなしているのである。また、これらの臨床家たちの中には、古典研究を中心にした在野の研究家が多く含まれており、学位とは関係なく鍼灸研究の一面を表していることも事実であろう。これら研究家の一部は北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部で学術的に鍼灸医学史を研究する者もいるし、百分科会以上ある日本医学会の第一分科会である日本医史学会で精力的に活動している者もいる。

しかし、大学における研究という面から考えると、戦後の昭和時代に導入された理学療法士（PT）は、従事者数では鍼灸師より少ないが、大学数、大学院数ともに鍼灸より先行しており、大学院に関しては国立大に10校設置されている（表5）。当然、これまでも見合った研究者を輩出しているので、鍼灸師の資質や研究分野において、斯界の基礎体力が不足していることが如実に分かる。研究者が少ないということは、鍼灸に関心をもつ医療関係医者のみならず、鍼灸に関して信頼できる情報を求める者の要求に、広く応じられていないと言える。

また、日本の医師には鍼灸を前向きに理解する者が相当数いるが、医師達が口をそろえて言うことは、患者にとって良い鍼灸をもっと国民に啓発して、研究に関しても広く世の中に知ってもらおう努力が必要であるという助言である。これらは一医師達の個人的な意見であって、鍼灸には関心すら持たない医師

が大多数であることが予測されるが、医師や研究者とともに活動し、鍼灸を何とかしたいと思っている鍼灸研究者達の忸怩たる思いは今もかつてもおなじであろう。

V 結語

本研究はWeb上で検索エンジンや検索システムを使用して、いわゆる孫引きに近い方法を繰り返し抽出・特定した。抽出方法の限界という課題が残るが、日本の鍼灸研究の変遷を概観し、鍼灸研究者の一側面を報告したことには一定の意義があると考えられる。さらに、これらの研究成果が斯界のみならず日本の社会に如何なる影響を及ぼしたのかを考察することは今後の研究課題である。

2008年、前年に修士課程として統合医療研究科に臨床鍼灸学専攻を設置したばかりの日本伝統医療科学大学院大学が11月21日付けで諸般の事情により学生の募集停止したことは非常にショッキングであり、今後の鍼灸後期高等教育に暗い影を落とすとともに、鍼灸専門学校急増に伴う斯界の不安をより一層現実近づけたともいえよう。

2007年（第2回）の本研究会では、鍼灸専門学校が急増するなか、教育の質が向上しているという事実は見あたらないと結論したが、斯界を俯瞰し将来展望を語るには多角的な面からの検証が必要である。鍼灸を医学に位置づけるには研究土台を強化して良質な研究者を数多く育成しなければならない。良質な研究者による学際的な成果をもふまえた鍼灸研究が社会に還元できるようになればいいし、社会から求められる鍼灸研究やプロジェクトが注目を集める時代が待ち遠しい。

しかし残念ながら、まだ鍼灸界は競争原理による研究者の質の向上が図られるほどの土壌はなく、見合った国の予算が配分される期待も薄いといわざるを得ない。いみじくも形井が「鍼灸界では研究を推進する人材の育成が課題」と学会誌で発言してから既に7年も経っている⁹⁾。

文献

- 1) 文部科学省. 平成19年度学校基本調査. 第1表 研究主体, 組織別研究関係従事者(企業等、非営利団体・公的機関、大学等).
- 2) 文部科学省. 平成19年度学校基本調査. 87 博士課程の専攻分野別入学年度別卒業生数(2-1)
- 3) 文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課. ポストドクターをめぐる現状について. 大学・公的研究機関等におけるポストドクター等の雇用状況調査結果のポイント. 2005.
- 4) 芹沢勝助. 鍼灸の科学 理論篇. 第2版20刷(1959年初版). 医歯薬出版. 1983:45-50.
- 5) 広瀬日出治. 鍼灸の歴史 復刻版. 大阪府立盲学校同窓会. 1984:247-282.
- 6) 医道の日本. 医学博士を取得した鍼灸師. 医道の日本1992;(580):176-7.
- 7) 中村辰三. 大学・大学院の教育における臨床力養成の方策. 第48回全日本鍼灸学会学術大会パネルディスカッション 鍼灸教育への期待. 全日本鍼灸学会雑誌2000;(50)1:19-2.
- 8) 北出利勝他. 鍼灸高等教育機関・大学院博士課程修了後の動向調査(その4) 第57回全日本鍼灸学会学術大会会議録. 全日本鍼灸学会雑誌. 2008;(58)3:236.
- 9) 形井秀一. 鍼灸界の基礎体力の強化を. 全日本鍼灸学会雑誌. 2002;(52)2:巻頭言.

謝辞

石丸圭荘教授(了徳寺大学) および的場大祐氏(医道の日本)の研究協力に感謝申し上げます。

表5 2008年の鍼師と理学療法士の実状

	従事者数	専門学校数	4年制大学数	大学院数
鍼師	135405	85	5	3
理学療法士	65571	158	70	33

厚生労働省資料、東洋療法研修試験財団資料および理学療法士協会HPより作成、視覚障害者学校を除く。